

今昔物語

山や海に囲まれ、京築地域の中核として人が行き交い、歴史と文化が育まれてきた行橋市。昔懐かしい行橋の風景や町なみの、「今」と「昔」をご覧ください。

～ Vol.031 子どもの遊び

昔の子どもたちにとって遊びは、日常生活の中から自然に生まれるものでした。江戸時代には、こま回しや凧あげ、羽根つきなどが季節の行事と結びつき、人々の暮らしの中に溶け込んでいました。さらに戦前の日本では、空き地や路地を舞台に鬼ごっこやめんこが盛んに行われ、子ども同士の交流を深める場ともなっていました。

こうした遊びの姿をたどると、時代ごとの生活環境や価値観、そして子どもを取り巻く社会のあり方がみえてきます。

1955年頃 / 昭和30年頃

紙芝居を見るこどもたち

戦後の日本においては、社会の復興とともに、子どもたちの遊びの風景にも新たな広がりが見られます。街角には紙芝居屋が自転車で現れ、駄菓子を手にした子どもたちが集まり、物語に耳を傾ける、そんな光景が商店街や寺社の境内、路地のあちこちに広がっていました。ベーゴマやビー玉、ゴム跳びに興じ、仲間と技や勝負を試しながら歓声をあげる光景が、子どもたちの日常の一部でした。

娯楽がまだ限られていた時代であって、これらの遊びは想像力を育み、人と人とを結びつける文化として息づいていました。



▲養島の浄念寺の山門前で紙芝居を楽しむこどもたち。「黄金バット」や「鞍馬天狗」などが人気でした。1953年のテレビ放送開始と、1959年の皇太子明仁親王（現・上皇陛下）のご成婚パレードの放映をきっかけにテレビが普及し、街頭紙芝居は急速に減少しました。

2026年 / 令和8年

「あそぼっちゃ」で遊ぶ子どもたち

昭和50年代以降、都市化や住宅環境の変化により、子どもたちが屋内で過ごす時間は次第に増えていきました。その流れの中で、昭和58年(1983)に任天堂からファミリーコンピュータ（ファミコン）が発売。遊びの様相は大きく変わりました。変化し始めます。また近年は、猛暑や厳冬といった異常気象が屋外公園での遊びを制約する要因となっています。

こうした状況の中、このたび開館した室内型子どもの遊び場「あそぼっちゃ」は、屋外遊びが困難な時でも、身体を思いきり動かして遊んだり、友だちとの交流など、多様な遊びを安全かつ快適に体験できる場として、地域社会における遊びの文化を支える拠点となることが期待されます。



▲プレオープンで遊ぶ子どもたち。笑顔や歓声があふれる空間で天候に左右されることなく、思いきり体を動かしながら、自由な時間をのびのびと過ごしている。

現代では、さまざまな場所でテレビゲームやスマートフォン、タブレット端末を手にする子どもたちが増え、YouTubeやTikTokなどの動画配信サービスの広がりによって、遊びのスタイルはさらに変化しています。室内で画面に向かう時間が増える一方、友人同士で楽しむシール交換、いわゆる「シル活」のような新しい交流の形も生まれています。こうしたデジタル文化の広がりや、遊びの可能性を拡張する一方で、人と直接関わり合う経験や自然の中での体験を希薄にしているのではないかと懸念も指摘されます。

これからの社会において、子どもたちの健やかな成長を支える遊びとはどのようなものなのでしょうか。私たちは今一度、そのあり方を静かに問い直す必要があるのではないのでしょうか。